

学会ホームページ <http://jasce.jp>

082号(2025年9月30日)

目次

第21回全国大会報告

学会新体制

『協同と教育』『協同教育実践論文集』への投稿募集中

学会ワークショップ 今後の予定(判明分)

学会認定トレーナーのご紹介

各地の研究会・勉強会

ショートレター (会員からの投稿記事)

第21回全国大会報告

大会テーマ：懐深いやんばるにおける対話と共鳴

「懐深いやんばるの地に包まれながら、未来の教育を創造・想像する素敵な大会を一緒につくりたい」。そんな願いを込めて準備を進めてきました第21回大会が、9月13日(土)と14日(日)の2日間、名桜大学(沖縄県名護市)で開催されました。大会には161名(会員100名・一般61名)もの方々にご参加いただき、活気に満ちた大会となりましたことを、心より御礼申し上げます。

「協同による教育は、持続的に世界平和をつくる教育」という想いを体現するように、大会初日には、名桜大学の木村堅一先生による記念講演「学びを共に創る：学生、教員、

ピア・サポートが育む協同教育」が行われました。名桜大学における学生主体のピア・サポート団体の立ち上げから、数々の学習支援の実践に至るまで、学生と教員がいかに「学びの壁」を乗り越え、共に成長できる環境を創り上げてきたか、建学の理念である「平和・自由・進歩」が織り込まれたような軌跡を辿るお話に、会場には教育への熱意が渦巻いておりました。

今大会では、8件のワークショップと4件のラウンドテーブル、22件の口頭発表、18件のポスター発表が行われ、多岐にわたる対話がありました。また、参加者のうち約半数が1日目の夕方の情報交換会にも参加されました。第20回大会で「自分も実行委員の気持ちで参加する!」とみなさまが手を挙げてくださった通り、情報交換会も含めて、あらゆる場面であたたかく活発な交流があり、これは私たちが当初思い描いていた情景でした。大会に関わる一人ひとりが心を解放し、自由な発想で語り合う「参画型共創大会」の姿です。

様々な境界を超えた繋がりが心地よく紡ぎ広げられていたこと、教育実践・研究という枠を超えて協同の意味が全世界に浸透していく予感、実行委員会一同のこのうえない大きな喜びでございます。

そして、開会式を祝福するかなのような大きな虹や、エイサー演舞の熱気を包むかのようなスコールなど、「懐深いやんばる」の自然に見守られながら、豊かな「対話」を紡ぎ、心の「共鳴」を確かめ合う、奇跡のような2日間を過ごすことができました。全てに感謝しかございません。

不慣れな私たちを温かく心強く応援し、ともにこの大会を創り上げてくださり、本当にありがとうございました。

「にふえーでーびたん。またんめんそーりよー!」

次回の第22回大会は大阪府大東市で開催されます。また新しい扉をひらき、さまざまな成果や話題をもって皆様と再会できますことを楽しみにしております。

日本協同教育学会第21回大会実行委員会

委員長 平上久美子

学会新体制

会長 小松誠和(久留米大学)
副会長 鮫島輝美(関西医科大学)
事務局長 舟生日出男(創価大学)
理事(12名・五十音順)
織田千賀子(藤田医科大学)
熊谷みち(名取市立第一中学校)
小松誠和(久留米大学)
真田穰人(兵庫教育大学)
鮫島輝美(関西医科大学)

JASCE

サルバション有紀(上越教育大学)
中西良文(三重大学)
西口利文(大阪産業大学)
平上久美子(名桜大学)
舟生日出男(創価大学)
水野正朗(東海学園大学)
蓮行(京都大学)
顧問(3名・五十音順)
杉江修治(中京大学名誉教授)
関田一彦(創価大学)
安永悟(久留米大学)

『協同と教育』『協同教育実践論文集』への投稿募集中

『協同と教育』および『協同教育実践論文集』への投稿を随時受け付けています。『協同と教育』『協同教育実践論文集』の新規投稿はWebフォームからの投稿となります。投稿フォーム、執筆・投稿規程は<https://jasce.jp/1091format.php>にあります。投稿受理から査読を経て採択が決定されるまでに通常数ヶ月以上を要します。なお、『協同教育実践論文集』については、投稿者が執筆のサポートを受けることを希望する場合は、学会員の中から世話人を立てることができます。みなさまの投稿や問い合わせをお待ちしています。

学会認定トレーナーのご紹介

アドバンス講師として水野正朗先生、ベーシック講師として佐瀬竜一先生が、審査を経て学会認定トレーナーとして認められました。現在、8名のアドバンス講師、13名のベーシック講師がいらっしゃいます。(研修委員会)

学会ワークショップ 今後の予定(判明分)

<ベーシック>

11月15日(土)、16日(日)【主催】

会場：大阪医科薬科大学(大阪府高槻市)

講師：小松誠和・安永 悟

<ベーシック>

2026年3月7日(土)、8日(日)【主催】

会場：創価大学(東京都八王子市)

講師：久末俊幸・関田一彦

<アドバンス>

2026年3月7日(土)、8日(日)【主催】

会場：創価大学(東京都八王子市)

講師：久保田秀明

最新情報、詳細情報、参加のお申し込みは学会HP (<https://jasce.jp/1031workshop.php>)からお願いいたします。

各地の研究会・勉強会

(東京地域)

協同学習を用いた看護教育研究会 in Tokyo

◇教育現場は、生成AI(Artificial Intelligence: 人工知能)や対話型AIの進展により、大きく変わろうとしています。2025年度の「協同学習を用いた看護教育研究会 in Tokyo」では、AIの進展が看護教育にもたらす新たな可能性に焦点をあてて研究会を開催します。

7月26日(土)、創価大学(八王子)にて「協同学習を用いた看護教育研究会 in Tokyo」の第4回研究会を開催しました。今回のテーマは、「AIと協同学習 — 看護教育の新たな可能性を拓く〜生成AI・対話型AIを活用した主体的・対話的な学びの創造〜」です。講師には創価大学教育学部教授の山内豊先生をお招き

し、AIの理解と活用の実際について学びました。

当日は、看護系教員に加え教育に関心を持つ方々など、計17名が参加しました。講演後には、ワールドカフェを通じて「協同学習を用いた看護教育にAIをどう活用できるか?」をテーマに意見交換を行い、以下の成果が生まれました。

- ・「AIは道具から、対話と思考のパートナーへと進化する」
- ・「プロンプト(質問・指示)と対話により主体的学習を促進できる」



JASCE

- ・「AIのハルシネーション(誤り)を学びに転換できる」
- ・「AIなら失敗を恐れず、何度でもトライ&エラーが可能である」
- ・「AIとの対話を通じて得られる自信が授業への積極的参加を促し、学習の好循環を生み出す」

今後は、各教員が教育現場に持ち帰って小規模に実践した成果を、次の研究会で共有できる場を提供していきたいと考えています。これらの取り組みは新たな研究の着想にもつながりますので、興味のある方はぜひご参加ください。初めての方も大歓迎です。

本研究会は、協同学習を軸に、現場に根ざした教育実践と教員同士の学び合いを促進する場です。今後とも参加者の声を反映しながら、共に学び、成長する場として発展させていきたいと考えています。

連絡先：代表 添田百合子(創価大学看護学部 ysoda@soka-u.jp)、副代表 武信真理子(東都大学沼津ヒューマンケア学部)

創価大学教職大学院主催 教師力・授業力アップセミナー

◇テーマ：主体的・対話的な学びのある授業を創る：協同学習からのアプローチ

概要：前半60分程度、ブレイクアウトルームも活用しながら協同学習の基本と、主体的・対話的な学びのある授業づくりに向けた効用についてお話しします。後半は、参加者の皆さんとの質疑を通じて協同学習の可能性について学び合います。

講師：関田一彦(創価大学教職大学院教授、日本協同教育学会顧問)

日時：10月26日(日) 13:00～14:30

Zoomでの開催ですが、定員は100名となっています。

参加費無料：こくちーずから申し込んでください。

<https://kokc.jp/e/db70aaaa68c4a07cbda5051aef921ed2/>

(大阪地域)

協同学習を用いた看護教育研究会

◇第59回「協同学習を用いた看護教育研究会」を、8月23日(土) 13時30分～17時30分、グランフロント大阪ナレッジキャピタル「The Lab」アクティブスタジオで開催し、静岡、愛知、京都、大阪から15名の方が参加してくださいました。

前回の研究会では関田一彦先生をお迎えし、有益なグループ活動における協同学習の基本的構成要素の重要性について再確認し学びを深め合いました。それを踏まえ今回は看護学の臨地実習に着目し、協同学習の視点から効果的な学生カンファレンスへの教育的支援について学び合うことを目的に、「協同学習を用いた学生カンファレンスの支援」をテーマに開催しました。

まず3名編成の5グループになりアイスブレイクをしました。参加目的と夏の暑さへの対処法ベスト3を紹介し合いました。色々な対処法を傾聴し合い「それ、いいですねえ!」と笑顔で盛り上がりました。次に、今回のテーマを提案された堀川真知子先生が1.協同学習の基本的構成要素、2.看護学実習とカンファレンスについてミニレクチャーを行いました。その後、学生が行う1.望ましいカンファレンス、2.望ましくないカンファレンスについてディスカッションしました。参加者は事前準備として、この2項目について自

分の意見を付箋に書いて参加されたので、グループ毎にTチャートに付箋を貼って意見交換しました。その後、全体で「お散歩参観」をして共有し意見交換しました。

休憩を挟み後半では、解決したいカンファレンスの状況に対する協同学習を用いた具体的な支援の方法を検討し合い、5つのグループが発表して全体で質疑応答を行いました。最後に、グループ活動を振り返ってコンプリメントを行い閉会しました。

事後アンケートでは、参加者から以下のような声が寄せられました。

- ・今回は参加者の人数は少なかったが得られた学びはいつもと変わりなく手応えがあった。
- ・協同学習の基本的構成要素を満たすカンファレンスについて個人思考してディスカッションしたことで、協同学習の実践の在り方について理解が深まった。
- ・堀川先生のミニレクチャーにより何を大切に分析していくと良いのかがわかり、具体的な支援に導くまでのイメージがすぐにできた。
- ・参加者の話し合いの中から具体的にたてになることが発見された。それらを協同学習の基本的構成要素と関連付けて考えることで意味づけが明確になり実践する動機づけになった。
- ・話し合う時間がしっかりあって意見を聞き合い、3人の意見が出つくすまで話し合うことができて満足感があった。Tチャートを活用した成果物を作成したことで学びを深めることができた。今後の実習指導に活用できるヒントになった。

JASCE

- ・カンファレンスでも教師や臨床指導者からの評価を気にして自己中心的に振る舞う学生がいる。自他共栄の協同の精神を自覚して取り組めるように指導していく必要がある。
- ・カンファレンスの場面に限らず、常に協同学習の構成要素を軸に据えた教育活動の必要性和意義について、あらためて理解を深めることができた。

終了後の懇親会では楽しい談笑のひとときを持つことができました。今後もよりよい企画運営に努め、皆様のご参加を心よりお待ちしております。

文責：緒方巧

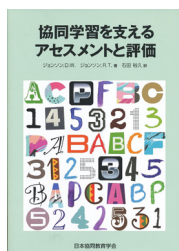
◇【今後の開催予定】次回の第60回は、11月8日(土)、13時30分～17時30分、場所はグランフロント大阪アクティブスタジオです。テーマなどのご案内は10月中旬に配信させていただきます。

連絡先：研究会代表 緒方巧 (t-ogata@baika.ac.jp)



(中四国地域) 協同学習研究会(岡山)

◇第2回研究会を7月26日(土)にオンライン開催しました。土曜10時～12時にも関わらず、20名を超える参加を頂きました。ありがとうございました。



今回は『協同学習を支えるアセスメントと評価』の第2章「目標設定のための会議」を講読しました。厳めしいタイトルのため、身構えてしまいましたが、本文を仔細に読むと、私たちが日々の授業で意識し、行っていることだと判ります。つまり導入部で本時の「めあて」を子どもたちと共有したり、「めあて」そのものを子どもの言葉で立てさせたり、あるいは学習課題を把握させたり吟味させたりすることなのです。そして1時間の授業の見通しやその着地点を共有したり、評価基準と評価基準を共有することで、学習への動機付けを高めたり、客観的に自己評価できる資質・能力の育成に繋がることなのです。

本文が描くことを、日々の実践と照らしあわせて読み進めることで、日々当たり前に行っていることの意義と価値を再認識したり、新たな知見や方法を得ることができる勉強会でした。

◇次回(第3回)は10月18日(土)10時～12時です。参加希望の方は高旗(takahata@okayama-u.ac.jp)までメールでお知らせください。出入り自由です。テキストを事前に読んでおくことが参加の条件です。第4回は12月20日、第5回は2月28日

(いずれも土曜10時～12時)にオンラインにて開催します。テキストはAmazon経由での入手が便利です。皆様のご参加をお待ちしています。

連絡先：高旗浩志(岡山大学教師教育開発センター takahata@okayama-u.ac.jp)



(九州地域) 長崎県央看護学校看護図アプローチ研究会

◇8月20日、長崎県央看護学校(諫早市)にて第25回長崎県央看護学校看護図アプローチ研究会が開催されました。同校の教員はじめ、長崎県内、福岡県、県外からも申し込みがあり、途中の出入りも含め20数名の参加者が濃密な“看護図の時間”を過ごしました。本会は「25回目」とされています。しかし実際にはカウントに入るかどうかという会もたびたび開催されているということで、熱心に継続的な取り組みがなされています。

今回は「看護図アプローチと創造性の育成ー創造は無関係の関係から始まるー」がテーマに掲げられました。「創造」は、何かを創り出すこと、新しい意味を生み出すことはもちろん、人と人との関係にもいえることです。「創造」は例えば「教師と学生」という人の関係のみならず、

JASCE

“学ぶことと看護”という関係にもいえることです。一見将来に関係がないと思われる学習であっても、やがて臨床の現場（職業）に関連していく学び。そのような学びも必要なのではないでしょうか。副校長円能寺貞子先生の言葉をお借りすれば、「他者の意見を受け入れることや、他者を尊敬する力といったものが自然に身についていく」。そうした本質的な結びつきを、看図アプローチは可能にします。

午前中のプログラムは「ポジティブきゅうちゃん」を用いたアイスブレイク（筆者担当）に始まりました。単なる自己紹介ではなく次の学習につながるような時間にすることを目標に実施しました。参加者の間では、きゅうちゃんを誰に見立てて見るのか、こちらに来るのか・あちらに行くのか、どうやって行き来するのか等々、様々な視点からの読み解きが共有されていました。アイスブレイクにも看図アプローチの読み解きの理論が隠れています。そのため、参加者たちはお互いのことを知



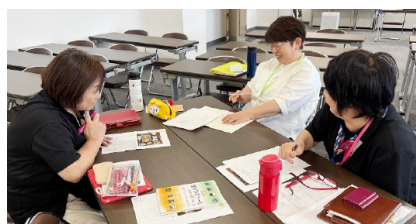
り合いながら、自然にその理論にふれていく時間となりました。

その後の鹿内信善先生のワークショップでは最新のビジュアルテキストが呈示され進められました。定食の写真を用いた読み解きでは「なぜ？」と問わずに「なぜ？」を引き出すコツにもふれられ、実際の授業場面を想定したお話がたくさん聞かれました。「なぜ？」はつい多用されがちです。何度も問われると学習者は飽き飽きしてしまいます。そうならないためには学習者が「～なので」「～ので」が言いたくなる発問とビジュアルテキストが不可欠です。看図アプローチはそれ自体が「～なので」「～ので」が言いたくなる構造をもった学習法です。1回のワークで「～なので」「～ので」が発信できるようになるのは難しいかもしれませんが、何度か繰り返して鍛錬することによってより確かに身につけていきます。

午後のプログラムは長崎県央看

護学校の先生方のワークショップで始まりました。杉本真紀先生・中村伊織先生・西村優子先生が、それぞれ撮影した写真を2枚ずつ用いたビジュアルテキスト読解授業を展開されました。一見すると「無関係」である2枚の写真ですが、意外性のある発問によって見事に「関係」づけられていくような内容となっていました。関係づけることが難しい問題は、グループのメンバーや全体での共有によってスッキリ感を得ていきました。学校として看図アプローチを導入した先駆である長崎県央看護学校。「新人です」という先生もいらっしゃる中、ワークショップは全く違和感なく、さらなる発展を予感させるものでした。

最後のプログラムは再び鹿内先生から、シンプルな絵図から深い読みを誘うもの、法律に関するもの、トップダウンの考え方等、普段の授業にいかせる考え方や教材が示されました。参加者の中には、読み解



JASCE

きの中で芽生えた自身の心の動きに向き合い、その深層心理や、学生に呈示する上での留意点について深く考察される方もいらっしゃいました。

質疑応答の時間は、いつしか各グループでのリフレクションタイムとなりました。司会の田中伸子先生や講師を務めた鹿内先生が何かはたらきかけたわけではなく、自然とそのような時間に突入し、あっという間に1時間が経過していました。各グループ思い思いにディスカッションしており、その中でさらに「納得解」や「スッキリ感」を得ていた様子でした。参加者全員が主体的・協同的に、深い学びを実現していました。

このような会にできたのも長崎県央看護学校が独自にこつこつ研究活動を続けてこられたおかげだと思います。今後は、長崎県内の学校や県外の学校、その他の機関とも連携した新たな“県央モデル”の発展が期待されます。

(文責：石田ゆき)

連絡先・問い合わせ：TEL0957-25-3232 長崎県央看護学校 田中伸子先生 または 全国看図アプローチ研究会事務局 (kanzu.approach.office@gmail.com)

(全地域)

全国看図アプローチ研究会

◇『全国看図アプローチ研究会研究誌』25号を公刊しました。

「看図アプローチ」が「探究の方法」として若い世代にも受け入れられ始めました。25号第2論文の第1筆者は高校生です。

掲載論文▼

1. 看図アプローチを活用した定時制高校「英語コミュニケーション

I」の追実践－2022 年3月の実践との比較－(江草千春)

https://kanzu-approach.com/journal/kanzu-journal.vol.25_pp.3-21.pdf

2. 看図アプローチを利用したLGBTQに関する小学生向け教材についての予備的検討－教材作成プロセスと学習会での検討・実践－(三原菜奈海・森 孝文・溝上広樹)

https://kanzu-approach.com/journal/kanzu-journal.vol.25_pp.23-33.pdf

3. 看図アプローチとSDGs (鹿内信善)

https://kanzu-approach.com/journal/kanzu-journal.vol.25_pp.35-43.pdf

4. 編集後記 (鹿内信善)

<https://kanzu-approach.com/journal/kanzu-journal.vol.25-henshukoki.pdf>

連絡先：研究会事務局長 石田ゆき (kanzu.approach.office@gmail.com)

タオス・インスティテュート・ジャパン「TIJ Festival タオス祭2025」

◇タオス・インスティテュート®は、社会構成主義の第一人者であるケネス・ガーゲンが中心となって立ち上げた組織で、社会構成主義の考えをもとに研究や実践を推進することを目指しています。米国ニューメキシコ州タオスで設立されて以来、30年を超える歴史を持ちます。賛同者は世界中でさまざまな活動を展開しており、社会構成主義の理論と実践は、人々の間の関係性のつながりの中に意味や価値、行動の源を見出します。<https://www.taosinstitute.net/>

この度、3回目のタオス・インスティテュート・ジャパン総会を早稲田大阪高等学校にて開催いたします。社会構成主義的アプローチに基づく研究や実践に興味のある方はぜひご参加ください。

(<https://taosinstitutejapan.com/>)

【今年のテーマ：「関係×学び－Relation×Learning」】

本大会での学びは学校教育に限定せず、より広い意味での学びを取り上げ、関係という視点から対話を深めていきます。

大会ではThe Taos InstituteのアソシエイトであるCeliane Camargo-Borges博士によるオンライン講演「Design Thinking & Social Construction -A practical Guide to Innovation in research-」や、探究学習や学びの実践に関するセッションを企画しています。

昨年と同様に、研究者と実践者が共に作る社会について考えていきます。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

日時：2025年10月25日(土)

～26日(日)

会場：早稲田大阪高等学校

〒567-005 大阪府茨木市宿久庄7丁目20-1

申し込み：<https://tij2025.peatix.com/view>

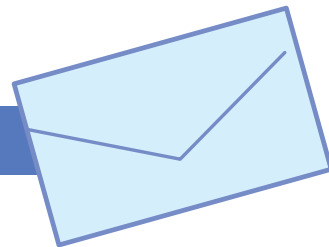
参加申し込み〆切 2025年10月10日(金)

プログラム：25日(土) Celiane Camargo-Borges博士によるオンライン講演

26日(日) 企画セッション

お問い合わせ：info.taosjapan@gmail.com (共同代表 鮫島輝美・東村知子)

ショートレター 会員からの投稿記事



『「わかる」はどう深まるか—子どもの思考の発達と協同的探究学習』(藤村宣之著 ちとせプレス)を読んで

藤村氏は認知心理学者。思考過程の研究に際して、collaborationを視野に入れた、実践現場で生きる研究を重ねてきている。本書では、その成果を通して「協同的探究学習」を提案している。その背景には、今の学力問題、即ち、追究すべき学力が「できる」学力に留まっており、思考力、問題解決能力、協調性、自律性といった汎用スキルの育成、さらにそのスキルを統合的で生きた力にするという、学びが目指すべき本質に向かっていないことがある。藤村氏の「協同的探究学習」では、互いの考えを認め合うことで自己肯定感を高めるという、同時学習の視点が含まれている。認知心理学からの研究ではあるが cooperationがもたらす教育的意義への着目がなされている点も興味深い。

第1章では、教育の質の向上のポイントとして「わかる」学習、深い学習の重要さが論じられる。第2章では、TIMSSとPISAの結果から、日本の子どもの学力に「わかる」という点での弱さがあることを指摘している。3章では「わかる」とはどういうプロセスを辿ることかを解説するが、その考察でPiagetの構成主義が基本に置かれていることは興味深い。人間発達の原理を基本に踏まえた議論は大切である。第4章から7章までは、「わかる」学力の実現に関わる藤村氏の実証研究が紹介される。心理学になじみのない読者には少々読解が面倒だけれど、研究で扱った課題は算数・数学、さらには

社会科と、実際の教科の教材を用いており、実践者には、深まりのある教材づくりの上での手掛かりが多く得られる内容である。それらは、ハウツー的な提案ではなく、汎用性のある、原理の提案になっており、有意義である。子どもが「わかる」場合のわかり方、躓きの理由や種類といった事柄への理解に資する内容である。

第8章からは、「わかる」がどう深まるかが内容となる。協同学習(Cooperative Learning)の理論は、その出発点にBrunerらによる教育の現代化の動向があった。したがって、思考過程に関する研究を取り入れた理論となっており、単にグループダイナミックスの成果だけを踏まえてきているものではない。しかし、このところのcollaboration研究からの、協同(協働)研究が明らかにしてきている思考過程、仲間との情報のやり取りについての成果は十分に魅力的である。

認知心理学研究からも、その研究が進む過程で、協同学習と同様の認識が生まれてきているようだ。8章では、個人の学習における、他者の意義が論じられ、グルーピングより課題が大事であること、協同の単位はクラスであること等々は、協同学習の知見と同様である。9章では「協同的探究学習」とは何かがまとめて紹介される。「わかる」、そしてそれが深まる学習活動を導くための非定型問題への取り組みを、個人、協同、個人という3ステップで

展開させるという提案である。ただ、協同ステップが学級全体での交流というスタイルのようで、今一つそこでの教師の役割が不明だった点は気になった。認知心理学者の市川伸一氏が提唱する「教えて考えさせる授業」では、「教えて」は教師の出番だと教師が張り切り、結果的に受け身の授業にしてしまう事例がしばしばある。クラス全体での高め合いは協同学習も提唱するところだけれど、それが教師の差配で動いていくようなやり取りであったならば、全員の成長にまで本当に届く授業になるかどうかは疑問である。教師の役割についての記述が不十分である点は気になったところだ。また、「わかる」ことに向かう学習活動がなかなか生じない理由に、「わかる」ことが学びだという学習態度が子どもの中に根付かないということがある。子ども自身が学習評価の主体になっていないということがその大きな理由ではないかと思うのだが、そういう点の仕掛けも、協同的探究学習の中に欲しいと思った。

本書を読み、これまでの協同学習と、認知心理学からの、学習者の学習過程理解と相互作用過程の理解を生かした授業研究との、より密接な連携が有意義だろうと強く感じる。それは、たんなる相補的な関係ではなく、深まり合い、高まり合いのある連携になるに違いない。

(中京大学名誉教授
杉江修治)